
今日も彼はワンと鳴く！

JC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も彼はワンと鳴く！

【Nコード】

N6997L

【作者名】

J C

【あらすじ】

明治から続く洋服屋の社長令嬢『弥勒地 彩妃』、そして長年そのお目付け役をしている執事『犬成 健太』。世間知らずのお嬢様と忠実な執事が巻き起こす、ベッタベタの学園ラブコメディー！！

第一話 我つくす、ゆえに我あり（前書き）

どうも、JCです。

まず、これを少しでも気になって読もうと思ってくださってありがとうございます。

本当は、短編用に書いていたものなんです。

が、あまりにも長くダラダラと書いてしまい、短編として1ページに載せるのはきついと思い。

こうやって6話完結の短い連載にさせてもらいました。

内容としては、ベツタベタの設定の典型的なラブコメディーです。

きっと、続けて全部読めると思っているので、もしよかったらどうぞ！！

第一話 我つくす、ゆえに我あり

彼女の名前は『弥勒地^{みろくじ} 彩妃^{あやき}』、弥勒地家の長女にして唯一の子だ。父は、明治初期から代々続く高級洋服店『みろくや』の現社長。

「お前は良家の娘なのだからこそ、清く正しく美しく心を心がけなさい」と言われて育てられてきた。

弥勒地家というだけで、彼女には危険が寄って来る事も多々ある。だが、彼女には『ポチ』が付いているから大丈夫なのだ。

そして彼、名前を『犬成^{いぬなり} 健太^{けんた}』と言う。

弥勒地家に五歳で来てから十二年、彩妃に仕えて十年になる。

彩妃の父に、彩妃のお目付け役謙お世話係謙護衛の命を受けている。そして、当の彩妃からは『ポチ』なる銘を授けられている。

「主は絶対服従、害は神速排除」を常に心がけており、毎日の日々を修行と思い、精進している。

「行つてらっしゃいませお嬢様」

「はい。行つて参ります」

大勢の使用人に見送られ、少女と青年が広大な敷地内を車の元まで歩く。彩妃と健太だ。

彩妃は赤が入った茶色の髪を、頭の両側で白いリボンでとめており、服はフリフリの制服。どこからどう見てもお嬢様だ。

健太の方は、オールバックの銀髪に黒ぶち眼鏡、白いシャツと赤いネクタイの上に黒のベスト。どこからどう見ても執事だ。

二人は彩妃の通う『皇麗学院高校^{おうれい}』に向かうため、黒い高級車へ乗

り込んだ。

「ねえポチ。今日のお弁当は何かしら？」

「今日は、ごはんに玉子焼きにポテトサラダとミートボール、あとタコさんウィンナーです」

「まあ、タコさんウィンナー！ 嬉しい！」

弁当の中身がひどく庶民的なのは、彩妃の母のせいだ。

セレブだからといって、セレブな物を食べなきゃいけない分けではない、という理由らしい。

そんな話を話しているうちに、車は高校へと到着する。

皇麗学院高校は共学の、いわゆるセレブ高校だ。

色々な良家、名家の子供達を通い、敷地内には『執事・使用人待合室』まで設けられている。

登校時になると、生徒達がそれぞれの執事や使用人を連れて登校してくる。

彩妃もまた、いつもの様に健太に見送られ、2年E組のクラスを目指す。

「おーっす！ おっはよう彩妃！」

「おはようございます、紀香さん」

一番に挨拶をしてきたのは、『三条^{さんじょう} 紀香^{のりか}』、彩妃とはかなり仲の良いクラスメイトだ。

綺麗な紺色の長い髪を後ろで束ねていて、大人しそうな外見とは裏腹に勝気で明るい。

世間知らずの彩妃に色々教えようと、よく勝手に連れまわすので、健太からは迷惑がられている。

「あんたさあ、いい加減その敬語とさん付けやめなさいって」
「すみません。幼い頃からのクセで、どなたに対してもこうなってしまうんです」

「まあ、もう慣れちゃったからいいけどさあ！」

彩妃はニコツと笑いかけて窓際の自分の席に着く。

紀香は先ほどから不思議そうに辺りを見回している。

「あれ？ 今日、ポチは？」

「きつともう、待合室に行ってると思いますけど？」

「ええ！？ だってあいつ、いつつもウザったく教室の前まで着いてくるじゃん！」

「あら、そうでしたっけ……」

「あんたもあんたで、ほんつとに天然よね！ まあ、あたしはバカ犬がいない方がいいんだけどさ」

すると、彩妃のすぐ後ろから突然声が聞こえてきた。

「誰がバカ犬なんですか」

「うわっっ！！？ でたっ！！」

「まあ、ポチ。どうしたの？」

そこには、いたって真面目な顔の健太が、窓から頭だけヒョコッと出していた。

「お弁当をお忘れになられていたので、お届けにあがりました」

「まあ、わたくしつたら。わざわざありがとうポチ。優しいのね」

「有難きお言葉」

「ちよつとちよつとちよつとお！！ あんたら普通に会話進行してるけど、ここ三階よ！？」

「あら、そうでしたっけ……」

「はい。お嬢様の教室は三階にございます」

「いや、だからあ！　ございますじゃなくって！　あんた、え、なに？　どうなってるの？」

「……立っておりますか？」

「何よその、なにか問題でも？　みたいな感じ！　だいたいそこに立つとこないでしょ？？」

健太はなんと、外の壁の少し下に、窓と平行に付いている細い水道管の上に器用に立っていた。

ただ足の幅の三分の一もないので、足を横にし大股を開き、両腕を大きく広げて壁に手をつけていた。

それはなんとも異様でマヌケな姿だったので、登校してくる生徒達
は驚き惑っていた。

「ではお嬢様、のちほど」

「ええ、また後で」

「いや、のちほどたつて、あんたそれ……」

「ちんぱん」

「え……え、ええええええええええ！！？？」

健太は「とうっ」という掛け声と共に跳び、シュタツと着地した。そして、まるで何事も無かったかのように、平然と歩いていった。

その姿を窓から見下ろしていた紀香が、「あんたのポチはどういう構造してんのよ」と呆れている。

第二話 ムッチムチなんです

ガラガラという教室の戸が開く音がする。

その後に、金髪の髪を立てた、男子にしては少し背の低い生徒が一人入ってきた。

『喜多川 康人』きたがわ やすと、紀香の他に彩妃が仲良しなクラスメイトだった。

「オーッス！ ムチムチドジ子と貧乳女！」

「だ、誰がつ、くっ……ひ、貧乳はステータスよ……！」

「おはようございます、康人さん」

「彩妃！ あんたもちよつとは否定しなさいよ……！」

「えーっと……わたくし、ドジ子ではありませんっ！」

「「ソッチかよ……！」」

というミニコントの後、席に着こうとした康人が突然硬直する。

そして、この世の終わりの様な顔で彩妃の方を怯えた目で見ている。いや、正確には彩妃の後ろを。

そして紀香もまた、康人の視線の先を確認し、そのドス黒い狂気の正体に気付き後退った。

——ゴゴゴゴゴゴ

実際にそんな音がしたかは分からないが、この時の康人の頭の中では、はつきりと聞こえていた。

「おい……その害蟲がいちゅう」

「ひっ！ え、え？ お、おれの、事？」

「そっ……その下品な金髪の貴様だ」

なんと、健太が先程と同じ位置で、真顔だが明らかに康人へ向けて恐ろしい殺気を放っていた。

その声には、あらゆる負の感情が籠められている。

「ポ、ポチ。あんた、いつからそこに」

「お、おい三条。ポチって、弥勒地……の？」

彩妃が自分の執事にポチと名づけている事は、学校では有名になっている。

そのポチを始めて目にした康人は、名前とのあまりのギャップに凍り付いている。

「あら、本当！　いつからそこにいたのポチ？」

「つい……先刻からです、お嬢様おおおい害蟲っ！……！」

「はっ、はひいっ！……！」

「貴様……お嬢様をドジ呼ばわりしよったな」

「ひいっ！！　す、すすすいませんん！！」

「ム、ムチムチの方は認めてるんだ」

「はい。ムツチムチです……が！！　だんっつじてドジではありませんん！！」

どうやら康人は、健太の中での彩妃関連の地雷を踏んでしまったらしい。

健太の少しずれているスイッチに疑問を抱きつつも、紀香は口を出さない事においた。

「もう、ポチ。何をそんなに怒っているの？」

彩妃は彩妃で、まったく空気を読まず、にこやかに話しかけている。

彼女が話しかけるたびに康人と紀香は、健太を怒らせやしないかとヒヤヒヤしている。

これが天性の天然の恐ろしい点でもあり、凄い点でもある。

「いえ、お嬢様。私は怒ってなどおりません。ただ……」

健太はいつの間にか窓枠を越え、教室の中まで入り込んでいた。そして、ゆっくり一歩、また一歩と康人に近づいていく。

「害蟲は……排除すべええええつつし……!!」

「ひひひひひひひひひひ…… たたたたすけてええええ……!!」
「ポチ……!! めつつつ……!!」

彩妃の大声で、健太はビクツと止まった。

健太の二本の指は、康人の目の3ミリ手前で固定されている。

「よしっ。いい子ね」

彩妃にそう言われると、「失礼……致しました」と言い康人をキツと一瞬睨み、踵を返す。

そして、やっぱり窓から帰っていった。

「ポチって言うより、ケルベロスね」と紀香は思った。

——キーンコーンカーンコーン

下校のチャイムが鳴った。

健太は校舎前で、紀香の執事『草薙・J・セバスチャン』、通称『セバスさん』といた。

セバスチャンは、アメリカと日本のハーフで、日本的な顔立ちの黒

い短髪だが目だけは青い。

他の執事は、自分達の主人を見つけ早々と帰っていくのを横目に、二人はひたすら待っていた。

「……遅いつ！」

「確かに遅いね。まっ、うちの紀香お嬢様に限っちゃいつもの事なんだけどね」

「いったい何をやっておられるのだ」

「さつき、喜多川様とこのやつもまだ待合室にいたから、三人で一緒にいるのは間違いないよ」

「まったく……はっ！ まさかあっ！！」

健太は何かを思いつくと、校舎の方へ全速力で駆け出した。

「おいおい！ ポチ君！ どおーこいくのー？」

そんなセバスチャンの声も届かず、物凄い勢いで校舎の壁を、まるでゴキブリか何かの様にシヤカシヤカ登り、2年E組の窓から顔を入れる。

キャアーという女子生徒の悲鳴が聞こえた。

「すすすみませんっ！　う、うちの彩妃お嬢様を知りませんか？」

取り乱しながら窓の外から質問をする健太は、事情を知らない人から見たら、ただの変質者が何かに見えたことだろう。

「み、弥勒地さんなら、三条さんと喜多川君と遊びに行くって、結構前に帰りましたけど……？」

「……あんの害蟲めえええええ!!!!」

「ひいっつ」

セバスチャンは、鬼の様な形相の健太が帰ってくるのを見て、笑っていた。

「ポチ君、どうだった？」

「セバスさん。車を貸してくれっつ！」

「いいけど、僕も乗っけてっつてよ？一緒に行くよ」

二人は車に乗り込み、物凄い音で道路を擦りながら中心街へ向けて発車した。

第三話 ゲームセンターで迷子

その頃、執事達を上手く撒いたと思っている三人は、街をブラブラしていた。

どうやら、もつぱら健太の話題で盛り上がっているようだ。

「しかし、弥勒地んとこの執事はおっそろしかったなあ！ チビるかと思っただぜ」

「本当はチビったんじゃないのー？」

「チビんねえよ！ ガ、ガキじゃあるまいし……」

「ポチは、そんなに怖くないですよ？ ただ真面目なだけです」

「いやいや！！ 怖すぎるわよ！！」「いやいや！！ 怖すぎるだろ！！」

「そうですかあ??」

「だいたい、何でポチなのよ？」

「え、可愛くないですか？ だってポチですよっ!？」

「い、いや、まあ、そうだけど……う、うーん」

二人は彩妃の天然爆発に着いていけないと思い、それ以上はあきらめた。

それから一行は買い食いやウィンドウショッピングをして楽しんだ。そして、大型のゲームセンターに入ったとき、康人が「トイレ！」叫んで行ってしまった。

丁度二人きりになったと思い、紀香はふと疑問に思った事を聞いてみた。

「そつえばさ、あんたポチには敬語使わないわよね？ 第一、まづポチだしね」

「あつ、言われてみればそうですね。お家でも使用人さん達にも敬語ですのに。なぜでしょう？」

「それってさ、もしかしてあんた、惚れてんじゃないの??」

「……?」

紀香の言葉の意味がよく理解できなかったのか、彩妃は首を傾げている。

「だからあ！ ポチの事が、ス、キつて事!!」

そう言われて、やっと把握できた彩妃が、今度は物凄い勢いで取り乱しながら、顔を真赤に染めた。

「ままつ ままつ まさかあ！ そそそんな事、そんな事、ありえませ……ん?」

「自分でも、どうなってるのか分かってないのかよっ!」

「だってだって……ポチは、ポチですよ？ そんな、だって、そんな……」

「あー分かった分かった。ごめんごめん！ あたしが悪かったわよ。忘れて!」

「そんな事……」

「あつ！ ほら!! あれ面白そうじゃん！ やろうよ!!」

彩妃が、自分の中で思考迷路に迷い込んでしまったのを見て、紀香は話題を変えるように、ゾンビを銃型のコントローラーで撃って倒すゲームをやりだした。

するとそこに、康人がトイレから帰ってきた。

康人は辺りを見回し、「あれ？ 弥勒地は?」と聞いた。

紀香はまだゲームに集中していたが、康人の質問が頭の中で繰り返されてやっと振り返る。

「……………え？」

「困りました」

彩妃はゲームセンターの中をウロウロしている。

紀香に言われた一言が気になって考えているうちに、逸れてしまったのだ。

「うーん、完全に迷ってしまいました。どうしましょう」

彩妃は今時の女子高生にしては珍しく、携帯電話を持っていない。何故なら、何時如何なる時でも健太が着いていたからだ。

そんな明らかに迷子の彩妃を、四人組の男達の中の一人が見つめていた。

「おいっ、ちょっと見てみろって」

「あ？　なんだよ！　今これに集中してんの！」

「おい。あれって皇麗学院の制服じゃね？」

「え、マジで!？」

彩妃達の通う高校はここらではかなり有名で、制服も変わった物なので、一目でどこの生徒かが分かってしまうのだ。

「マジだ！　うっほ！　ムチムチだあ!!」

「どーする？」

「イクっきゃないっしょ！」

「でも確か、あいつらって常にボディーガードみたいのが一緒にいるだろ」

「今は一人だぜ？　つか、あの子迷ってんじゃない？」
「よし……俺にまかせろ」

そう言った男が彩妃の方へ歩いていった。
そして、彩妃の前まで行くと、なんとも人懐こそうな顔で話しかけた。

「やつほ！　なんか迷ってるみたいだけど大丈夫？　どつたの？」

「あの、友達と逸れてしまいました」

「友達つてもしかして皇麗学院の？」

「はい。男の子と女の子と三人でいたんですけど……」

さすがは世間知らずなだけあって、彩妃は何の疑いもなく自分の状況を説明してしまった。

「ああー……そーいやー、俺見たよ！」

「え！　本当ですか！？」

「うん。その制服、結構目立つしね。彼等も誰か探してるみたいだったから気になってたんだよ」

「どこにいるか分かりますか？？」

「おいで。連れてってあげるよ」

「ありがとうございます！！」

彩妃は満面の笑みで頭を下げ感謝した。

男は彩妃の肩に手をかけ、先導するようにゲームセンターの外へ出る。

その背中では、後ろ手に親指を立て仲間に合図を送っていた。

残りの三人はそれを見て、反対側の出口から出ていったのだった。

第四話 探せ！！

同時刻、紀香と康人は必死になって彩妃を探し回っていた。

「おい三条！ いたかつー！？」

「はぁ……はぁ……だ、だめ。ゲーセンの周りも探してみただ、どこにもいない」

「どうすんだよー！！ あいつ、ただでさえ世間知らずなんだぜー！！？」

「そんな事……あたしだって、分かってるわよー！！」

「おれ、もうやだぜっ！ あの変な執事に殺されかけるのー！！」
「誰に殺されるんです？」

そう言った康人の背後に、健太は気配もなく立っていた。言葉は丁寧だが、その顔には物凄い気迫が籠められている。

その後ろには、セバスチャンがニコニコしながら手をヒラヒラさせていた。

「ポチー！！ セバツさんー！！」

「あわわわわわわわわわわ」

「なぁ害蟲。何故、私が貴様を殺すのだ？ ん？」

健太が、前に屈んで思い切り康人に顔を近づける。

「まあまあ、ポチ君。そんな凄まじいの。紀香お嬢様、いったいどうしたんです？」

「大変なのー！！！！ 彩妃が、彩妃がいなくなっちゃったのー！！」

「お嬢様がつー？！ 害蟲うっ！ 貴様あああー！！！」

「ひいいい！！！！ごめんなさいごめんなさい！！！！」

今にも襲い掛かろうとする健太をセバスチャンが押させ、彩妃の捜索に二人も加わる事になった。

四人はゲームセンターを中心に、それぞれ四方に分かれて手分けして探す事にした。

彩妃は世間知らずだが、だからこそそう遠くへは行かないだろうと考えたのだ。

だが逆に、まったく行きそうな場所も思い当たらなかった。

そんな四人の気も知らずに、彩妃は男と並んで歩いていた。

二人はゲームセンターからは、すでにかなり離れてた場所にいる。

「あの、二人はいったいどこにいるんでしょうか？」

「あ？ あ！ ああ、二人ね。あのーなんて言ったかな、男の子の方」

「康人さんですか？」

「そーうそーう！ 康人ね、康人。俺のツレがさ、康人と知り合いらしくてさ」

「そうなんですか？」

「うん。そんで、そいつら今、公園にいるらしいからさ。俺が車で送っててあげるよ」

「まあ！ 何から何まで本当にありがとうございます。あの、ぜひ何かお礼を」

「お礼なんて、そんなのいいのいいの！ 後で何かしてもらおうよ！

…… たっぷりとね」

「はい！」

彩妃は完全に男の事を、通りすがりの親切な人しか見ていないようだ。

男は「こっちこっち」と言って、裏路地へ入っていく。

その前方には、黒いバンが止まっている。見たところ、どうやらガラスは全部マジックミラーで、中はまったく見えない仕組みになっている。

男は、「悪いけどツレも乗ってるんだ」と言ってドアを開けた。中には残りの三人が乗っていた。

「いらっしやーい。さ、乗って乗って！」

彩妃は、言われるままに車に乗り込んだ。

第五話 ポチ見参

「さーで、えつと君、名前なんだっけ？」

車の中で待っていた男達の内の、一人が聞いた。

彩妃はご丁寧にご自己紹介をする。

「あ、申し送れました。わたくし、弥勒地彩妃と申します」

「彩妃ちゃんかー。かわいいねー。お父さんはお金持ちなの？」

「明治時代から続く洋服店の社長をしております」

「おっほー！ じゃあ、お金いっぱいくれそうだねー！！」

四人の男達はかなり興奮しだしていた。

そして「ちよつと待っててね」と言い何かを相談しだした。

だが、簡単に全員の意見が一致したらしく、すぐに元の位置に戻り、ニヤニヤしながら彩妃に話しかける。

「じゃあ、彩妃ちゃん。これからさ、ちよつと楽しい事しようよ」

「楽しい事ですか？ ですが、まず紀香さんと康人さんに会わないと」

「ああ、大丈夫大丈夫。そのうち来るって」

「ですが、先程は公園で待っていると……」

「あああー！！ うっせーなああ！ 別に待ってねーよ！ 康人さん？ 誰だっつーの！！」

そう叫ぶと、彩妃の両側の男達が身体を押さえた。

彩妃は何が何だか分からず、とりあえずニコニコしていた。

運転席から後ろを向いていた男の手には、いつのまにかビデオカメラ

ラがあつた。

どうやら、『楽しい事』をした後には、その映像をつかつて弥勒地家を強請る作戦らしい。

そして、一人の男の手が、まさに彩妃のスカートを捲ろうとした時、

「ひっ！ な、なんだこいつ！！？」

男が指差した先には、車の中を覗き込むように窓にベッタリと顔をくっ付けている誰か。

それは健太だった。

「おいっ！ この中で何やら、ものすごく怪しい事が行われているぞー！！」

「えっ！ 本当に！？」

後ろの方に待機していた康人も駆け寄ってきた。

そして二人して、ガラスに顔をくっ付け中を覗きこむ。

すると、運転席にいたビデオカメラの男が降りてきて、二人に凄む。

「おいっコラ！ テメーら、なに人の車ん中ジロジロ見てんだよ！！？」

そう言われた健太は、パツといつもの平静さを取り戻した。

「大変失礼致しました。実は人を探しておりまして、弥勒地彩妃という方をご存じないでしょうか？」

「みろくじ？ …… あっ」

男の表情が一瞬変化したのを、健太は見逃さなかった。

「ご存知……ですか？」

「あ？ し、しらねーよ！！ ちっ、もうどっか行けよ！！」
「嘘だあぁっ！！！」

なんと、そう叫んだのは康人だった。

康人は、男の前まで行きガツと胸倉を掴んだ。

「おれ、見えたぞ！！ 中に男と彩妃が乗ってた！！！」

「ああ！？ うっせーぞガキ！！ さっさと失せろ！！」

「彩妃を返せ！！！」

「うぜーんだよっっ！！！」

男は、退こうとしない康人に苛立ち、思い切り殴りつけた。
康人は「うっ」と呻いて、車の後ろの方へ殴り飛ばされた。

「害蟲っ！！！！？」

せめてそこは名前と呼んでくれと思いつつ、康人は地面にひっくり返る。

「ちっ、早く消えねーからだぞ、ったく」

「お待ち下さい。本当にお嬢様をご存知ないんですか？」

「あ、ああ。知らねーよ」

「いつ、っ……嘘だ！ おれは見た！！ あれは絶対に彩妃だ！！」
「！」

「だから、知らねーっつってんだろおおが！！？」

「……………」

健太は何も言わず、康人の方へ歩み寄った。そして、彼の手を引っ張って起こした。

「分かつたろ！ そのガキ連れて早く帰ってくれ！！」
「分かりました。帰ります……………」

何かを思いつめた様に、健太は自分の拳を見つめている。そして、ギュッと力強く握る。

「………… 彩妃を返してもらった後でなあああ！！！！」

そう叫ぶと、思い切り車のガラスを殴りつけた。

ガラスはいとも簡単に粉碎し、中では驚く男達とまだ事態を把握してない彩妃がいた。

そんな彼女に、健太は手を差し出し、優しく言葉を掛ける。

「お嬢様、お迎えにあがりました」

最終話 犬から人へ……

「まあ！ ポチ！ わざわざ来てくれたの？」

さすがに少し不安を感じていた彩妃も、健太の顔を見ていつもの笑顔に戻った。

「さあ、お嬢様。帰りましょう」

「でも、まだ康人さんと紀香さんが……」

「彩妃！！大丈夫か！！？」

「あらっ、康人さん！ いつの間に」

完全に空気と化した男達が、我に返ってやっと思覚らしくなってきた。

車の中の男達は、彩妃を人質に取ったのだ。だが、いくら喚いてもまったく動じていない健太に少しビビり始めてもいた。

「て、てめええ！　だいたい、どうしてこの車だつて分かつたんだよ！？」

「私は、お嬢様の匂いを嗅ぎ分ける事ができるんです」

「え、マ、マジで？　うそ……だろ？」

「嘘です」

「てええええめええええええええええ！！！」

上ずった声で叫んだ男の後ろで、あろう事か、別の男が彩妃の腕を背中で捻り上げ、首に腕を廻した。

彩妃の「きゃあ、い、痛いです」という声を聞いた健太から、何かが切れる音がした。

——ブチッ

健太は、そばに立っていたビデオカメラの男を指でチヨイチヨイと呼ぶ。

「ああ？ んだよ！？」

近づいた男に待っていたのは、顔面への健太の全力のパンチだった。「ぶへえっ」と叫んで、男は遙か後方へ吹っ飛ばされた。そして健太は静かに康人へ呼びかけるが、その声には、今まで感じられなかった程の、怒気と覇気が感じられた。

「……おい、害蟲」

「へ？」

「……貴様は今から、ゲス野郎に格上げた……」

「え？ いや、でもそれ、別に上がって」

健太の突然の言葉に、恐る恐るつつこもつとした康人は、下から見えた彼の顔を見て、即座に考えを改めた。

「今……コイツらを害蟲と、ハッキリ認識した……」

「あっはは、何でもなかったです。はい」

「害は……神速排除だっつー！！」

それから健太の独壇場だった。

一番手前にいた男を、無理矢理に車の中から引きずり出す。みぞうちへの一撃を決め、相手が怯んだ所にまたも顔面パンチ。もう一人の男が車の中から出てきて、「てめえええ！！」と後ろから襲い掛かってきた。

そこへすかさず後ろ回し蹴りを喰らわせ、そのまま遠心力を使い上段回し蹴り。

あっという間に、三人の男を伸してしまった。

その気迫に満ちた後ろ姿は、最後の一人にトラウマを与えるには十分過ぎた。

そして康人にも。

結局、彩妃を捕まえていた男は、仲間がやられる姿を見て、泣きながら逃げ出した。

が、キレた健太に慈悲の心は無かった。

逃げる男を追いかけ、後ろから思い切り助走のついた跳び蹴りの食らわせた。

倒れる男を仰向けにし、止めの一撃を腹に打ち込んだ。

かくして、健太無双は終わりを告げた。

倒れた男達の間を抜け、怖くて顔を見れない康人の横を通り、車までいく。

一度、思い切り深呼吸をして車の中の彩妃へ言葉をかける。

「さ、お嬢様。帰りましょう」

そう言った健太の顔は、いつものポチに戻っていた。

彩妃を救出した健太と康人は、携帯で連絡をとり、紀香とセバスチヤンと合流した。

紀香は、康人の腫れた顔と彩妃を見て事態を把握し、泣きながら謝った。

セバスチャンは「ポチ君、お疲れ様」と健太に言った。

「彩妃いいい！！ ごめんねええごめんねえええ！！ あたしの、あたしのせいでええ！！」

「そんな、わたくしは大丈夫ですよ」

「本当に！？ どこも怪我してない？？ 何もされなかった？？？」
「はい。ポチが来てくれましたからっ！」

泣いている紀香を慰めながら、彩妃は健太へ笑いかけた。

健太は、「当然の事をしたまです」と言いつつも、少し恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「おいおい！！ おれは！？ おれも助けに行っただけど！？ 殴られたし！！」

「おい、害蟲」

「ひっ！ な、なんだ……ですか？」

急に自分の名前を健太に呼ばれて、康人は飛び上がりそうになりながら答える。

「貴様……さつきどさくさに紛れて、お嬢様の事を彩妃と呼び捨てにしたな」

「あ……バレてた？」

眉間にしわを寄せ、眉を八の字にした健太が、ゆっくりと近づく。そして、二本の指を顔の横に掲げ、いたって冷静に言い放つ。

「排除する」

「ひいひいひい！！　　って、あれ？　待てよ、確かポチも……」

「排除する！！！！！！！！」

「うわっ！！ たすけてええええええ！！！！！」

そして一行は、それぞれの帰路につくのだった。

帰りの車の中、彩妃と健太の間には微妙な空気が流れていた。

お互いに一言もしゃべらず、それぞれに外の景色を見つめている。特に何があつたわけでも無いのに、お互いになにか気まずさを感じている様だ。

すると、彩妃の方が、先に沈黙を破った。

「ポチ。今日は、助けに来てくれてありがとう」

「いえ、主を助けるのは執事の役目ですから……」

「そう……。あつ、手、怪我してる」

彩妃が健太の手に触れようとした時、咄嗟に健太は手を引っ込めてしまった。

彩妃は少し寂しそうな顔をし「帰ったら手当てしてあげる」と言った。

そしてまた、二人の間には沈黙が流れる。そこには、先程よりもっと重たい空気があった。

だが、次に沈黙を破ったのは、健太の方からだった。

「彩妃……お嬢様」

$$\begin{matrix} \neg \\ \vdots \\ h \\ ? \\ \perp \end{matrix}$$

「……いえ、何でもありません」

何かを言いかけてやめてしまった健太に、彩妃は怒るではなく、まるで小さな子供に対してするように、優しく微笑みかけて聞いた。

「なあに？　言ってごらん」

健太は、恥ずかしさと気まずさと遠慮で、何とも言えない顔になっていたが、意を決したのか、真剣な顔をして彩妃の目を見つめて言った。

「もう……もう、私のそばから、いなくならないで下さい、ね」

そう言うと、健太は彩妃の方を見つめ、さっき引つ込めた手を戻した。

彩妃はキョトンと何を言われたか理解していなかったが、自分の手の上に置かれた彼の手を、ギュッと握り、健太に屈託の無い笑みを向けた。

「うん。あなたも、ずっとわたくしのそばにいてね……………健太」

彩妃の笑顔と言葉を聞いて、健太は顔を真赤にしてまた外の景色を見るふりをする。

車内には相変わらず沈黙が広がっていた。

しかし、二人の手は、強く、きつく繋がれていた……。

そして、康人の執事は未だに学校で彼を待ち続けているのであった。

<お・わ・り>

最終話 犬から人へ……（後書き）

ここまで読んでいただき、真にありがとうございます！

一応、これで完結です。

なかなか自分で書いて面白かったので、満足しています。

ご意見、ご感想などがありましたら、どうぞ気兼ねなくお書きください。

ご拝読、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6997/>

今日も彼はワンと鳴く！

2010年10月8日13時03分発行